

連携先世界遺産：賀茂別雷神社（上賀茂神社）

本科目が取り組んだ課題・改善事項

7月26日(日)「賀茂の水まつり」の活性化 「上賀茂神社の行事の魅力」を学生の視点で発信する

■受講生

片山 菜穂（同志社大学・政策・3回生）、佐藤 春佳（立命館大学・法・3回生）、杉山 健太（京都産業大学・文化・3回生）、仲 真矢（立命館大学・法・3回生）、中田 雅輝（同志社大学・文・3回生）、長瀬 一朗（京都産業大学・文化・3回生）、西野 裕莉（佛教大学・社会・3回生）、平松 和之（京都産業大学・経済・3回生）、山本 惇弘（京都産業大学・経営・2回生）、横田 彩乃（京都産業大学・文化・4回生）、以上10名

■担当教員 若松 正志（京都産業大学・文化学部・教授）

活動目的・概要

賀茂別雷神社（上賀茂神社）から提示された課題は、「上賀茂神社の行事の魅力」を学生の視点で発信すること。具体的には、神社の比較的新しい行事である7月26日（日）開催の「水まつり」活性化のアイデアを出し、実際に行くことでした。

メンバー（受講生）は、4月中旬から5月にかけて、競馬・葵祭などの上賀茂神社の行事に自主的に関わり、その伝統や文化にふれ、アイデアを練りました。流し素麺、音楽奉納の依頼・運営、お茶席、大判百人一首、アンケート、水の飲み比べ、酒づくり、SNSの活用など、いろいろなアイデアを出し、神社や関係部署（保健所・消防など）とも調整し、準備を進めました。

上で下線を引いたものが直接企画し実施したものです。これ以外に広報活動（SNS、ポスター）を行い、絵馬神輿をかついだり、玉串奉納をさせてもらったりもしました。反省すべき点はいくつかありますが、流し素麺やお茶席・音楽奉納など外部団体の協力をえながら多くのイベントを実施でき、「水まつり」を盛り上げられたこと、そして私たちが成長できたことが大きな成果だと思います。



「水まつり」終了後の笑顔



流し素麺



玉串奉奠

絵馬神輿

◆主な活動

- 2015. 4. 18 ガイダンス・上賀茂神社の概要(キ京)、上賀茂神社訪問 (神社)
- 2015. 4~5 上賀茂神社の諸行事(競馬・葵祭など)に参加・見学 (神社など) <自主活動>
- 2015. 5. 9 インタビュー・トレ、mtg (企画相談。キ京)、懇親会
- 2015. 5. 30 見学・mtg (企画提案1) (神社)。全体オリエンテーション、コミュニケーション・トレ、全体懇親会、mtg (企画相談。キ京)
- 2015. 6. 13 mtg (企画提案2。神社)。
- 2015. 6. 27 mtg (企画相談。キ京)

- 2015. 7. 11 mtg (最終確認。神社)、取材。
- 2015. 7. 25 水まつり前日準備 (神社)
- 2015. 7. 26 水まつり (神社)
- 2015. 8. 25 連携先社寺と活動の振り返り (神社)。
- 2015. 8. 29 反省会
- 2015. 9. 26 mtg (発表準備)、プレゼン・トレ(キ京)
- 2015. 10. 24 中間発表、mtg (発表準備) (キ京)
- 2015. 11. 21 プレゼン・トレ、mtg (発表準備) (キ京)
- 2015. 12. 5 成果発表、世界遺産関係者と振り返り

* キ京=キャンパスプラザ京都。トレ=トレーニング。
mtg=ミーティング。プレゼン=プレゼンテーション。

活動の成果

水まつり

「水まつり」の活性化に関して、アンケートの実施や「水まつり」の宣伝など間接的な取り組みと、「水まつり」当日のイベントなど直接的な取り組みを行いました。

アンケートは、イベント企画を考えるうえで、寺社に関する意識やニーズを知りたいという関心から、上賀茂神社に近い京都産業大学の学生を対象に、若松教授の授業などを通して実施しました。回収した約140のアンケートを集計・分析し、イベントにつなげました。

広報に関しては、ポスター・ちらしの作成・掲示、SNS（ツイッター、Facebook）を使った宣伝を行いました。イベントが確定するまでに時間がかかり、十分な効果が得られなかったことが反省点です。

「水まつり」当日のイベントについては、当日午前中から「上賀茂手づくり市」が神社で行われ多くの来場者が見込めること、中心となる神事は夕方に行われること、これらをふまえ、参加者層を意識して、いろいろなアイデアを出しあいました。その結果、午前中から午後にかけては大判百人一首・流し素麺、夕方からはお茶席・演奏奉納などのイベントを実施することにしました。

大判百人一首は、水や夏に関わる歌を20首ほど選び、取り札をA3サイズのパネルに仕上げ行いました。流し素麺の待ち時間などに一定数の子どもたちの参加はありましたが、それほど多くの参加者を得られなかったことが残念です。

流し素麺は、企画としてはおもしろそうという意見が早くからありましたが、衛生面で保健所と、防火面で消防署との調整が必要でした。結局、道具類・素麺を流す技などに関して「世界流しそうめん協会」の協力を得ることで開催することができ、約140人の方（親子連れ、学生、外国人など）に、楽しんでいただきました。

お茶席も、表千家の佐々木宗聖先生の全面的なご協力（茶道具の提供、技術指導など）を得て、実施することができました。神社の「神山湧水」を使い、冷たい抹茶と和菓子を味わう機会を提供できました。

音楽奉納は、大学生と世界遺産をつなげることを意識し、いくつかの大学のサークルに出演を依頼しました。神社が依頼した地元のグループやプロの方とともに、それぞれの演奏を奉納し、夕方ひとときを心地よく過ごすことができ、神事につなげました。

絵馬神輿は、京都産業大学のボランティアサークルのひとつが中心となって行われた企画で、小学生に絵馬を書いてもらい、それをはめこんだ神輿をかついで境内を一周するものでした。われわれは前日の搬出を手伝い、当日それを担いで歩き、「水まつり」を盛り上げました。

さらに、神社のご厚意で、重要な神事である玉串奉奠を、私たちのクラスの代表がつとめさせていただきました。

このように、多くのイベントを企画・実施し、「水まつり」を盛り上げることができました。



大判百人一首



お茶席



音楽奉納

活動を振り返って

このような活動を行うにあたっては、連携先（賀茂別雷神社）との信頼関係、コミュニケーションがとても大切だと思いました。この点、5月の葵祭や10月の式年遷宮などの伝統行事にも、協力依頼をいただくなど、信頼関係が築けたと思います。

イベントの企画にあたっては、実施する際にどのような問題点があるかをあらかじめ考えたうえでアイデアを出し、そのうえで調整することが大事だと思いました。具体的には、流しそうめんにおける衛生管理の問題や火気の問題において、かなり調整に苦労しました。

そして、イベントのすべてを自分たちだけでやろうとするのではなく、さまざまな方の協力を得ることで、よりスムーズに実施できることがわかりました。具体的には、流し素麺の「世界流しそうめん協会」、お茶席での表千家の佐々木先生、音楽奉納での外部サークルなどの協力によって、私たちのクラスの少ない人数を有効に活用することができたと思います。

そしてこれらの活動を通して、世界遺産である賀茂別雷神社を、身近で大切な存在として感じることができました。

担当教員からのコメント

若松 正志（京都産業大学文化学部教授）

今年度から始まった、京都の世界遺産PBL。うまくいくか正直不安がありましたが、「水まつり」の活性化という課題はそれなりに達成でき、学生たちも十分成長できたと思います。

連携先世界遺産の賀茂別雷神社（上賀茂神社）と私の所属する京都産業大学は、これまでも「観月祭の活性化」や「紅葉音頭の普及」などのPBLを、キャリア教育として行っていました。私自身も、賀茂別雷神社とは研究面でのつながりがいくらかありました。

神社との最初のうちあわせで、「水まつり」の活性化を課題と決めたのは、学生たちの色々なアイデアを活かせるのは、比較的新しい行事であり（伝統的な行事は、しきたりや制約がどうしても大きい）、展開の幅も広いだらうということでした。とはいえ、「水まつり」当日は7月26日（日）。授業開始から約3か月、しかも定期試験の時期。履修者が集まるかという不安もありましたが、京都産業大学の学生が7名、同志社大学・立命館大学・佛教大学の学生を含め、総勢12名で活動を開始しました（残念ながら2名が途中で離脱）。

学生たちとの初回の顔合わせは4月18日（土）の午前中。課題の概要、賀茂別雷神社の概要を話し、午後からは神社を訪問しました。以後、およそ2週間に1回のペースで、キャンパスプラザ京都または神社で、「水まつり」の活性化について、提案、議論、検討、相談、調整しました。役割分担を決め、全体の方向性を決め、それぞれがアイデアを持ち寄りました。当初は、酒造メーカーとタイアップした「酒」づくりなどのアイデアも出ましたが、費用や時間との関係、許可の問題など、さまざまな制約を知り、内容が絞られていきました。結果的には成功に終わった「流し素麺」も、保健所の助言・指導をふまえ、何度も計画を練り直し、「世界流しそうめん協会」の協力を得るなどして、実施にこぎつけました。「神山湧水」を使ったコーヒーづくりをされたAGFさんの仕事ぶりなども見せていただきました。学生たちは、自分の大学の勉強もしながら、ラインやメーリングリストなどで情報交換し、授業以外でも何度も集まって作業しました。今回の学生たちは、PBLの経験者もあり、またみんな積極的だったこと、各自が個性を發揮したことが、うまくいった要因だと思います。教員としては、どこまで口を出すか、助け船を出すか、悩みました。結果を振り返り、成果発表をまとめつつある現在では、もう少し口出ししてもよかったかなと思っています。

ともあれ、この授業を通して、学生たちの成長が十分感じられました。彼らの今後のさらなる成長を期待するとともに、この「水まつり」の活性化をもう少し追究していきたいと思っています。

